学べるゲラ

第32回 東京都心の大雪

※2024年2月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

歌川広重の「江戸名所百景」には雪景色も登場する。今の銀座あたりの雪の夜を描いた「びくにはし雪中」は「山くじら」の大看板が印象的だ。「牡丹」同様にイノシシ肉の隠語。獣肉を出す「ももんじ屋」である▲「雪の日の七輪で咲く冬牡丹」は江戸川柳。幕末には肉食忌避の観念が薄れ、雪の日などににぎわったらしい。葛飾北斎の「富嶽三十六計」には江戸の茶屋で雪見を楽しむ女性たちの姿がある▲「江戸には雪の降ざる年もあれば、初雪はことさらに美賞し……雪の為に種々の道楽をなす事枚挙がたし」。雪を喜ぶ江戸の人々をうらやんだのは越後湯沢の文人、鈴木牧之だ。1尺の雪を大雪と考えるのは暖国ゆえと断じている▲1尺は約30㌢。東京都心の月の最深積雪では、明治以来6位に相当する。10年前の2月8日に27㌢を記録した際、小紙は1面トップで「記録的大雪」と報じた。鈴木が江戸に抱いた認識と差がない▲大雪警報が出れた5日の都心の積雪は9㌢。それでも交通網が乱れ、首都圏全体で200人以上がけがをした。江戸の人々のように雪を楽しむ余裕がないのは、都市化の進展でかえって脆弱化したためか▲混乱する首都の姿を1極集中的なニュースで伝えられれば、雪国の人たちが鼻白んでも無理はない。気候が異なれば習慣も違う。「習い性になる」は古今東西の真理だろうが、江戸川柳にも「雪見とは馬鹿馬鹿しいと信

濃いい」と雪国の思いに想像力を延ばした句がある。そんな気持ちは忘れずにいたい。